

ステレオタイプとカートゥーン

——1894 年から 1905 年までの諷刺画を手掛かりにして——

東京情報大学 茨木正治

【目的】

この報告の目的は、一コマ漫画(カートゥーン)に描かれるシンボルに着目し、そのシンボルとステレオタイプとの関係を明らかにすることにある。カートゥーンでは欧米では、近代国家形成期に国家や民族を表すシンボル(ネーションシンボル)がよく用いられてきた。それらは、固定化された紋切型(ステレオタイプ的特性)の容姿によって(顎髭長身で星条旗模様の衣服と帽子をまとったアメリカのアンクル・サム、小太りのイギリスのジョン・ブルなど)表現された。このステレオタイプによる表象は、掲載メディアの伝達や読者の受容能力に制限のあった時代において認識(外交問題での内容や読み手のアイデンティティ確認等)を共有させる手段として有効であった。西洋化が文明化であった 19 世紀末から 20 世紀初頭において、日本はどのようなシンボルとして描かれたのであろうか。本報告では、日清・日露戦争期に海外の雑誌や新聞に掲載されたカートゥーンに見られるネーションシンボルを、日本のものと欧米のそれと比較しながら、当該シンボル形成にステレオタイプ様式や認知がどのように関与したかをみる。

【方法】

そこで、データとして、1894 年から 1905 年までに The American Monthly Review of Reviews の月ごとに掲載されている米を中心としたカートゥーン特集を分析対象とした。12 年間 144 冊の当該雑誌の約 2,500 点のカートゥーンから、約 200 点の日本を描いた作品を抽出し、シンボルを分類した。その時、分析期間を、「日清戦争時」(1894～95)、「戦間期」(1896～1903)、「日露戦争期」(1904～05)の 3 期に分けた。それとともに、これらの作品のテーマと依拠する事実を歴史研究文献(たとえば、飯倉,2010)や史料をもとに再構成した。また、茨木(1997)をもとにシンボルの相互関係をみることで、ネーションシンボルとして形成されていたか否かを明らかにしようとした。

【結果】

分析の結果、「日清戦争期」と「日露戦争期」に日本に関するカートゥーンが集中したが、前者では、武士や町人、町娘等江戸時代を彷彿させるシンボルとして描かれるものが多く、動物に擬える(animalization)も一定していなかった。後者の時期でも、戦争をテーマとすることから、軍人が多かったが、それとともに明治以降の職種を表現するシンボルが多く見られた。容姿については、小男性では柄で細い目をして、ちょび髭を生やす人物が分析期間通じて多く見られた。「日清戦争期」や「戦間期」までは、女性をシンボル化する作品が見られたが、「日露戦争期」にはそれがまったく見られなくなった。また、明治天皇を描くものが若干見られたが、あくまで当事者として示されたものでネーションシンボルとしてではなかった。

【結論】 以上から、日本に関するカートゥーンでは、ネーションシンボルの形成はこの時期では見ることはできなかった。日本人ステレオタイプとして後日称されるサル顔、細い目、小柄な風体はこの時期にその萌芽が見出せた。

飯倉章,2010,『日露戦争諷刺画大全(上)(下)』芙蓉書房出版. 茨木正治,1997,『「政治漫画」の政治分析』芦書房.